



ふれあい牧場ひつじの里では、ゆうゆうと草を食むヒツジが。ゴールデンウイークには「ヒツジの毛刈りショー」や、刈りたての毛を使ったクラフトイベントもある

働いている人は、こんな人!

イチゴは正直な植物で、手入れがとても大切。11月～4月までは、受粉のためミツバチの巣箱をハウス内に設置しますが、その際の温度管理もシビアで苦労が多いです

トウモロコシは低温が苦手。育てている人は、寒いときは寒冷紗(かんれいしや)やトンネルなどの資材をかけるのがコツです。手が掛かる分、かわいいですよ

西部知佳さん
岐阜県農業大学校を卒業後、ふる里農園美の関に就職しイチゴを担当

横幕稔子さん
ベテランのトウモロコシ農家であり、農園のお母さんの存在



(左)平成21年にスタッフが手づくりしたバーベキューハウス。2年後に本格的な施設に改修し、釜とかまども備えた。希望者は米炊き体験もできる(右)生鮮市場に並ぶのは、化学肥料はほとんど使わない元気な野菜。豊かな土づくりの秘訣は、地元の牛糞と有機質材だ

「記憶に残る糧」となり地域の農業を盛り上げる

常に上を目指してチャレンジ精神を燃やすスタッフの表情は、生き生きとしている。果樹の新たな栽培方法や、ふれあい牧場ひつじの里とピオトープ、いちごハウスの改修・拡大栽培補助から収穫までできる援農会員の募集。夢を語る高井さんの眼は輝いている。

「ふれあい牧場ひつじの里は、柵越しではなく、柵の中で動物とふれあえるようにしたいんです。隣接するピオトープにはわずかながらホテルも生息していますし、ザリガニ釣りもできますが、少し規模が小さいので、拡大を考えています。夏野菜を楽しんでもらうために設けたバーベキューハウスにも、ピザ窯が欲しいですね」。施設の整備だけでなく、季節ごとにイチゴとブルーベリーの摘み取り体験や、収穫祭などを開催。いつ来ても旬を感じるイベントが楽しめる。

また、農に関わるスタッフの育成は、地域の担い手不足解消への原動力にもなっている。いわば「農コミュニティ」で地域の農業に貢献するのが理想だ。

次々と新しいアイデアで施設を盛り上げながら農業の発展を推し進めている陰には、ふるさと農園の思いが込められている。「直売所での買い物やお散歩スポットなど、どんな目

今年の実りを味わってみませんか 夏のイベント情報

トウモロコシ狩り

- 日時 / 7月7日から8月上旬までの毎週末および祝日 1日2回(11:00～、13:30～)
- 料金 / 1セット1,000円
- 内容 / 畑でもぎたてを試食、持ち帰りは4本

ブルーベリー狩り

- 日時 / 6月15日前後～約1カ月間(要問い合わせ)
- 料金 / 大人1,000円、子ども700円、幼児400円(3歳未満無料) ※メール会員は100円の買物券進呈
- 内容 / 1時間食べ放題

ふる里農園 美の関 関市大杉567-10

TEL:0575-25-1588 営業時間:9:00～17:30

http://www.minoseki.net

文/成清 陽 デザイン/Beanstalk 白石純也

るといふ、うれしいサービスを受けられることもしばしばある。新鮮で安心安全な食品が並ぶ点も、支持される大きなポイントだ。

生産者と消費者がふれあう場として人気を博している同施設。有限会社ふる里農園美の関の生産部部长を兼任する代表取締役・高井博史さんによると、現在に至るまでは決して順風ではなかったという。「今でこそ実り豊かな畑が整備されていますが、かつては長らく荒廃地でした。土地

改良を経て農地になりました。平成17年に5人で会社を設立し、翌年に販売拠点を設けたものの、携わる生産者は少数。当時の生産量はごくわずかでした。10年以上の歳月をかけて少しずつ人脈を築き、今では米や野菜、果樹や養蜂など生産者200人超、スタッフ38人が集まった。生産に精を出し、あるいは直売所に農作物を卸し、消費者と交流する彼らとの縁は、人づてなど偶然の出会いで広がっていったという。

「事業の拡大も、縁があつて新設されています。ファミリー層を中心に人気のふれあい牧場ひつじの里は、牧場運営を目指すスタッフの入社がきっかけで設立されました。そうした良縁が重なって現在の形に漕ぎつけたものの、施設全体はまだ発展の余地があると考えるでしょう。まだ試行錯誤の段階なんです。年間約20万人が訪れるふるさと農園では、理想とする農業公園に向けた試みはまだまだ続いている。

かつて感じた土の匂いや感触、畑で食べた農作物の味を思い出す原点でありたい。



糖度20のトウモロコシ。もぎたてを生で食べると、ジューシーな甘さが口の中に広がる



トマトは「ルネッサンス」や「フルティカ」のほか、ミニトマトなどを栽培。給水管理は自動化され、糖度をのせながら生育させる

3種類のトマトを育てるビニールハウス。糖度7以上でフルーツトマトといわれる中、糖度18から20のトマトが実る



畑で栽培されるトウモロコシは、なんと10万本。「トウモロコシ狩り」は、自分でもいであらうという、贅沢な体験だ



いちごハウスでは、張りのある瑞々しいイチゴが迎えてくれる。1～5月の収穫期ともなると、摘み取り体験で1万3千人以上が訪れる



6月に入ると、ブルーベリーが色づき始める。「ブルーベリー狩り」のほか、土産用のブルーベリーの販売。ハイブッシュやラビットアイなど品種ごとの違いも確かめたい

「巻頭特集」自然と目いっぱいふれあえる「ふる里農園 美の関」

みなに愛される、かけがえのない「ふるさと」を目指して

ふる里農園 美の関のオープンが13年前。野菜、動物、体験、交流……。さまざまなエッセンスで彩られる「ふるさと」には、根強いファンも多い。その理由を探っていくと、名前に込められた特別な思いが見えてきた。

食べて、買って、農業体験 すべてそろえる畑の中の直売所

御嶽山や恵那山、日本アルプスを一望できる広大な畑と、生産者とふれあいながら新鮮野菜が手に入る生鮮市場。収穫体験ができる「いちごハウス」や「ブルーベリー農園」、ヤギやヒツジなどの動物たちと遊べる「ふれあい牧場ひつじの里(旧動物ふれあい広場)」。そして、同僚や友人たちと楽しく過ごせる「バーベキューハウス」。関ICから車で10分ほどに位置する「ふる里農園 美の関」は、施設の多彩さが魅力だ。家族連れからシニア層まで、多くの人が憩う場となっている。

キャッチフレーズは、「畑の中の直売所」。直売所に並ぶ農作物の在庫が切れれば、目の前の畑から収穫する。

的でも構わないので、この施設を幅広い世代の人が集まる「ふるさと」にできれば」と高井さん。「ふる里農園美の関の創業者であり、現オーナーでもある栗倉元臣氏の考えるふるさととは、記憶に残る糧のよなもの。たとえ10年経って景色が変わったとしても、かつて感じた土の匂いや感触、畑で食べた農作物の味を思い出す原点でありたいという思いが込められているんです」。

畑で穫れたばかりの生のトウモロコシにかぶりつくと、糖度20度という、フルーツのような甘味に頬が緩んだ。弾けるような初夏の旨味を生み出したのは、太陽と大地、そして生産者の細やかな手仕事。トウモロコシの味わい深さからは、ふるさとに對する熱く優しい思いが感じ取れた。